

『明六雑誌』とその時代

河野 有理

二〇一一年度の公開授業・比較思想A「明六雑誌とその時代」は、ゴールデン・ウィークの連休初日の四月二十九日に始まり、七月二二日に終わった。毎週金曜の四時限（二四時五五分から一六時二五分まで）、教室は二四号館（安井てつ記念ホール）二階の広々とした階段式の教室であった。初回講義が通常より大幅に遅れたのは、この年の三月に起きたあの震災と原発事故によって、東京女子大学全学の授業開始が、繰り延べられたためである。講義担当者は、講義自体の準備だけでなく、講義時間中に大規模な余震が発生した場合の対応について、頭を悩ませることになった。幸運なことにそれは杞憂に終わったのだが、それでも軽微な余震は、頻発した。

講義参加者——例年同様、学生だけでなく（概ね講義担当者よりはるかに高齢の）学外の方々も含まれていた——の意欲は、以上のような悪条件にも関わらず、極めて高かった。毎回、講義の最後にはアンケートシートを提出してもらい、次回の講義冒頭で、いくつかのコメントを紹介するという方式を——前々回の講義担当者以来の良き伝統

を引き継ぎ——採用したのだが、力作ぞろいのコメントを前に嬉しい悲鳴をあげることになった。講義参加者の意欲がもともと、多少の悪条件などものともしないほど、高かったのかもしれない。だが、それだけではなかったのではないか。あの日の記憶がいまだに誰の脳裏にも生々しく焼き付いていたことも（そして余震を通して常にそれが喚起されつづけていたことも）、あるいは関係していたのではないか。

丸山眞男が、「これまでのあり方はあれでよかったのだろうか。何か過去の根本的な反省の上に立った新しい出直しが必要なのではないか、という共通の感情」によって結ばれていたという、敗戦直後の「悔恨共同体」の存在について指摘したのは、「近代日本の知識人」（一九七七年、『集』第一〇巻所収）においてのことであった。ここで丸山は、「知識人が職場のちがいをこえてひとつの知的共同体を構成しているという意識が近代日本では成熟を妨げられてきた」としつつも、かかる「知性の王国への共属意識」の例外的な高まりを、三つのエピソード

に見いだす。そのうち、最後のエポックが、敗戦直後の「悔恨共同体」であり、そしてその最初のエポックが明六社である——「在官である」と在野であるを問わず、彼等はあくまで明六社という知的サロンの同人であり、明六社の解散後もそういう知的共同体の成員であるという意識を持ち続けた」（丸山前掲、一三九頁）——というのである。

明六社に関して言えば、丸山の見方は、基本的に正しい。彼らは、特定の真理をもとに認識し、それを一般大衆に宣伝し、教化する、その意味での「啓蒙」集団などではなかった。彼らの意見は、しばしば相互に食い違っていた。彼らが共有していたのは、複数の異なる意見の存在は、避けがたい必要悪であるばかりではなく、むしろ望ましいことであるかもしれないということの認識、また従って、意見の相違を恐れずに、自分の力で様々な事柄について一から考え直してみようとする態度であったように思われる。

もちろん、二〇一一年のあの日に起きたことは「敗戦」ではなかった。また、「瓦解」でもなかった。しかし、あの日とそれに引き続く事態によって、この社会にもたらされた様々な混乱は、明六社の同人たちも直面していたであろう「マインド之騒乱」（福沢諭吉）を追体験する契機となったかもしれない。明六社同人が、個別の意見の相違にも関わらず、共有していた知的態度。それがいかに貴重なものであるのかを、私たちはいわばその身をもって知ることになったのである。

「個々の閉鎖的職場をつなく共通の知的言語」（丸山前掲、二四四頁）

の厚みと広がりがあるが、この社会において、いまこそ試されている。そうした意識が漠然としてではあれ、共有されていたことが、講義参加者の高い意欲を下支えしていたのではないかと。

丸山は、敗戦直後の「悔恨共同体」の限界を、まさにそれが「悔恨」共同体として成立したことに由来すると指摘している。「戦争体験が風化するように、「悔恨」もまた時の流れの経過によって風化を免れな」いからである。では、明六社同人たちのあいだの「知的共同体の意識」が、次世代に引き継がれなかったとしたら、それはなぜなのか。丸山の説明は、明治国家の制度化の進展という状況証拠をあげるにとどまっている。明六社の活動それ自体の中に果たして「限界」があったのかどうか。その点は後進の研究者に残された課題であろう。ともあれ、二〇一一年初夏の教室にこもっていた熱気は、明六社の活動が、現在の社会について一から考え直し、それについて他者と議論したいと願うすべての老若男女に、今なお勇気を与え得るということをし、証明していただようと思われる。そのことは、講義担当者としての、そして研究者としての私にとっても、意外な発見であり、喜びであった。